

大宮遺跡第5次発掘調査概報

1982年

広島県教育委員会

目 次

I はじめに	(1)
II 調査の概要	(2)
III 採出の遺構	(5)
IV 出土遺物	(9)
V まとめ	(16)

凡 例

- 1 本書は、昭和56年度の国庫補助金を得て広島県教育委員会が行った大宮遺跡の第5次発掘調査概報である。
- 2 本概報の執筆、編集は鷲田滋が行った。
- 3 遺物の整理、実測、図面の整図、写真は文化課職員が行った。
- 4 本概報に使用した遺構略号のSDは溝を示す。
- 5 調査地区割は、100m四方を大区とし東西に西よりA～H、南北に北より1～13と番号を付し、その組み合せで呼称する。小区は便宜上地番とした。この基本となる基準点は下記のとおりである。

杭番号	標高 (m)	0点からの距離 (m)
N 600	15.462	599.998
N 550	15.356	549.998
N 500	15.256	499.998
N 450	15.099	449.998
N 400	15.018	399.998
N 350	14.903	349.998
N 290	14.801	289.998
N 250	14.727	249.999
N 200	14.636	199.999

杭番号	標高 (m)	0点からの距離 (m)
N 150	14.451	149.999
N 100	14.277	99.999
N 50	14.095	49.999
0	13.849	0
S 25	13.727	25.000
S 100	13.574	100.000
S 150	13.402	149.999
S 175	13.297	174.999

* 小数点第4位以下は四捨五入してある。

I はじめに

深安郡神辺町は埋蔵文化財の宝庫として知られているが、大字湯野の山王山東麓の水田地帯からも古くから土器が採集され、大宮遺跡として注意を払われていた。また、その周辺地域は伝備後國庁跡と推定され多处の地割も保たれていると考えられていた。しかし、それらの内容及び規模については不明であった。しかるに昭和48年にこの地に大規模な土地区画整理事業が計画されたため、昭和49年に、神辺町教育委員会が伝備後國庁跡（方八丁遺跡）の確認調査を実施した結果、計画地内の広範囲にわたって造構遺物が検出された。更には昭和50年に上記事業の都市計画道路工事中に、弥生式土器を多量に含む溝が発見された。このため広島県教育委員会では、遺跡の規模、内容を把握し、保存対策を講ずるために昭和52年度より国庫補助金を受けて年次的に調査を行ってきた。本年度の調査はその第5年次のものである。

これまでの調査の成果については、第1～3次調査にわたって弥生時代前期及び中期の環濠造構が検出され、第4次調査では弥生時代後期の集落が明らかになったが、出土遺物についても、縄文時代後期から中、近世にかけての豊富な内容を持ち、大宮遺跡が大規模な複合遺跡であることが判明してきた。

今回の調査は、かかる成果をふまえた上に早急に遺跡の範囲を確認する必要があるところから、昨年につづいて土地区画整理事業計画地域内全域にわたる確認の調査を主として行った。

調査は昭和46年11月4日から12月25日まで実施し、次の機関および各氏をはじめ地元の方々からの多大な協力を得ることが出来た。記して感謝の意を表するものである。

神辺町、神辺町教育委員会、神辺町歴史民俗資料館、土地所有者の猪原涉、猪原保、岡田島、河相格治、河相勝見、河相修三、河相進、河相孫次郎、河相ヨシコ、河相マス、川上次郎、神原コトメ、神原信男、神原義明、久保博、佐藤成之、佐藤守、佐藤貢、佐藤林蔵、佐藤亘、重政功、重政則夫、重政豊、高垣徹嗣、高垣定、高垣幸巳、竹原典子、徳永勝一、徳永正明、徳永義治、徳永順男、長谷川弘、藤田耕之、藤田伍郎、藤田政夫、藤田謙彦、藤田幸、安原正始、矢田一之、矢田正巳

II 調査の概要

1 既往の調査（付図）

大宮遺跡の調査は昭和48年に計画された「湯野土地区画整理事業」に対応して昭和49年度に
神辺町教育委員会が、伝備後國府跡の内容並びに範囲確認のため行った試掘調査が嚆矢となる。
これにより國府関連の成果は得られなかったものの、条里制地割や、弥生式土器、土師器、須
恵器を含む溝、池状造構等が計画地域内で検出された。更に昭和50年にも上記事業の都市計画
街路の工事中に弥生式土器を多量に含む溝がC 9区において発見されたため、県教育委員会では、
昭和52年度より国庫補助金を受けて年次的に調査を行い保存対策を講ずることになった。

昭和52年度の第1次調査はC 8、9区について行い、弥生時代前期から中期にかけて營なまれ
た二本の環濠を検出した（前期の土器を含む環濠はSD001、中期の土器を含む濠はSD002と
呼称される）。

昭和53年度の第2次調査は第1次調査の北側の水田に続くSD001、002について調査を行った
その結果、SD002については旧河床の可能性のあること、SD001がそれとの有機的関連を
もって人為的に埋められたものであること等の成果を得た。

昭和54年度の第3次調査は第1次調査の西側の水田を調査し、SD001の規模が長径80m短
径70mの長円形をなすものであることが推定された。また、環濠内側の集落については、弥生
時代の生活面が削平を受けていて明らかにならなかったものの、古墳時代の方形住居跡1が検
出され、大宮遺跡の時代複合的性格が確認された。

昭和55年度の第4次調査は、調査の対象を計画地内全域に及ぼし遺跡の規模確認を主目的と
して行った。C 3区で縄文時代後期の土器の出土、C 6区で弥生時代後期の集落跡の検出等の
成果を得た。更に計画地内の中央部大半が後世の削平を受けていて、遺物が拡散して出土する
ものの造構の遺存度が悪いという状況が明らかになった。

註

(1) 福山市史編纂会『福山市史』1963

(2) 松下正司、鹿見喜太郎、加藤光臣「神辺方八町（推定傳後國府跡）の調査」『草戸千軒町遺跡』
17、19、1975

(3) 広島県教育委員会『大宮遺跡第1次発掘調査報告』1978

(4) 広島県教育委員会『大宮遺跡第2次発掘調査報告』1979

(5) 広島県教育委員会『大宮遺跡第3次発掘調査報告』1980

(6) 広島県教育委員会『大宮遺跡第4次発掘調査報告』1981

なお大宮遺跡は狭義には弥生時代の環濠を中心とする地域を示していたが、土地区画整理事業計画地内
全域の調査を行う必要上周辺の方八丁遺跡、正殿寺遺跡等を含めた広い地域を示した遺跡の名称となって
いる。

2 調査の経過

本年度の調査は昭和56年11月4日から12月25日にかけて行った。調査の対象地域は計画予定期内全城とし、第4次調査と同じく遺跡の規模確認を目的とした。また、調査対象地域の面積が広大なため總てトレンチによるものとし、一部を除いては発掘を遺構検出面で止め、遺構の平面確認と、遺物の出土状況をもって遺跡の範囲確認を行う事とした。調査を実施したのはC 3～5・7～12区、D 4・6・11・12区、E 3～5・12区、F 3～7・10・11区、G 5～11区、H 5区である。

この結果、計画地内の北西部、南東部は旧低湿地、中央部は旧沖積微高地であった原地形が推定される資料を得たが、第4次調査で明らかなように、その大半が削平を受け遺構の遺存は極めて悪いかまたは消失してしまった状態であった。そこで遺構が遺存している部位は大別して2地点あり、C 7～10区を中心とする西部地点、東西にD～Fの3を中心とする北部地点であった。

西部地点ではC 7区で弥生時代後期から古墳時代にかけての集落跡の存在が推定され、C 8～10区では弥生時代前期～中世にかけての遺構遺物が複合して検出される状態であった。中でもC 9区でSD002の南側に新たに弥生時代前期～中期の土器を含む溝SD003が検出され環濠の性格についての新たな一面面が加わった。

北部地点では縄文時代後期の土器の出土をはじめ、中世に至る継続的な遺構遺物の検出があり面積の広範さと合わせ重要な遺跡となることが推定された。

大宮遺跡第5次発掘調査概要

区	地番	遺構	遺物	備考
1	C-3 1186-3	1 T-湿地帯 2 T-ピット、溝	1 T-無 2 T-土師器、須恵器、瓦	
2	C-4 1192	1 T-湿地帯 2 T-湿地帯と微高地の境界	1 T-土師器、須恵器、縁 鉢土器 2 T-弥生後期土器、土師 器、須恵器	1 Tの遺物は浮流 したもの
3	C-5 758	湿地帯	無	
4	C-5 757	湿地帯	土師器、須恵器	遺物は浮流したも の
5	C-7 647-1	1 T-湿地帯 2 T-湿地帯	1 T-土師器、須恵器、瓦 2 T-無	
6	C-7 657	1 T-住居址の可能性ある 方形土坑、ピット、溝 2 T-ピット	1 T-古式土師器 2 T-古式土師器	

	区	地番	遺構	遺物	備考
7	C-7	658-1	ピット	古式土師器	
8	C-8	638-1	1 T-湿地帯 2 T-湿地帯と弥生中期環濠が接する。他に平安時代のものと思われる溝	1 T-土師器、須恵器、中世土器 2 T-弥生中、後期土器、土師器、須恵器瓦、中世土器、石包丁	1 Tの遺物は浮流したもの 2 T-円面鏡出土
9	C-8	637-1	1 T-湿地帯と弥生中期環濠内側の遺構検出面が接する。 2 T-環濠内側の部位	1 T, 2 T-弥生中期後期土器、土師器須恵器、瓦、包丁	
10	C-8	624	無	無	削平を受けている
11	C-8 C-9	623	1 T-平安時代と思われる溝、ピット 2 T- 3 T-	1 T-須恵器、土師器、瓦 2 T-須恵器、土師器、瓦	1 T-軒平瓦出土
12	C-9	626	1 T-S D002, S D003、 ピット 2 T-S D003 3 T-S D003 ピット	1 T~3 T-弥生前期~中期土器、土師器須恵器、石鎌、片刃石斧	
13	C-9	620-1	1 T-ピット、浅い溝、 S D002 2 T-ピット 3 T-S D003	1 T~3 T-弥生前期~中期土器、土師器須恵器、石鎌	
14	C-9 C-10	619-3	1 T-ピット、溝 2 T-ピット 3 T-柱穴列、溝	1~3 T-弥生中期~後期土器、古式土師器須恵器	
15	C-10	618	溝、ピット	弥生後期土器、土師器、須恵器	
16	C-11	601-1	湿地帯	中世土器小量	深さ1mでパラス層となる
17	C-12	492-1	湿地帯	無	タ
18	D-3	995	1 T-無 2 T-ピット	1, 2 T-土師器、須恵器	1 Tは湿地帯となる
19	D-4	872-3	1 T-浅い溝 2 T-無	1, 2 T-土師器、須恵器	やや削平を受けている
20	D-6	745	無	無	削平を受けている

区	地番	遺構	遺物	備考
21	D-11 597	1 T-無 2 T-溝地帯	1 T-無 2 T-土器片少量	1 Tは削平を受けている
22	D-12 503-1	無	無	削平を受けている
23	E-3 992	土塙、溝	弥生後期土器、土師器、須恵器、瓦	
24	E-3 991	ピット	土師器須恵器、瓦(軒丸瓦を含む)	地山がゆるやかに北に傾斜
25	E-3 886	1 T-溝、ピット 2 T-ピット	1 T-土師器、須恵器 2 T-〃〃	縄文後期土器出土
26	E-4 866	ピット	土師器、須恵器、少量	削平を受けている
27	E-4 862-1	1 T-無 2 T-ピット	1 T-無 2 T-土師器、須恵器、石鎚	1 Tは削平を受けている
28	E-4 861-1	1 T-無 2 T-ピット 3 T-ピット	1 T-無 2 T、3 T-須恵器、土師器	1 Tは削平を受けている
29	E-5 792-1	無	土師器、須恵器	削平を受けている
30	E-12 508-1	無	無	削平を受けている
31	F-3 894-1	ピット	土師器、須恵器	
32	F-4 892	ピット、溝	弥生後期土器、土師器、須恵器	
33	F-3,4 902-1	住居跡と思われる円形土塙 弧状溝、ピット	古式土師器	遺存度良好
34	F-3 905-1	1 T-ピット、浅い溝 2 T-地形がゆるく傾斜	1、2 T-須恵器、土師器、 少量	1 T-縄文後期土器出土
35	F-4 857	ピット	須恵器、土師器	遺存度は悪い
36	F-4 848-1	1 T-亀山焼を据える土塙 ピット 2 T-無	1、2 T-須恵器、土師器 中近世土器	2 T-遺構は認められないが削平度は少い
37	F-5 796	溝(弥生後期)	弥生後期土器、土師器、須恵器	
38	F-6 729-1	溝地帯	無	

	区	地番	遺構	遺物	備考
39	F-7	687	1 T-無 2 T-時代不詳の溝、ピット	1, 2 T-土器細片微量	遺存度悪い
40	F-7	691	1 T-ややゆるやかな地山のおちこみ 2 T-削平を受けている	1 T-古式須恵器、土師器 2 T-無	島状に遺構が残る可能性のある部位
41	F-10	550-1	無	無	
42	F-11	556	無	無	
43	G-5	820-1	弥生後期のピット	弥生後期土器、中世土師器	遺存度良好
44	G-6	721-1	無	無	
45	G-7	715-1	無	無	
46	G-8	710-1	無	無	
47	G-9	703-1	無	無	
48	G-10	538-2	無	無	
49	G-11	532-1	無	無	
50	H-5	816-1	溝、ピット	土師器、須恵器	南側は近世以後の埋め立て

III 検出の遺構

本年度の調査において遺構が検出された地域は大きく2地点に分けられる。ここではC6~10区を中心とする西部地点と、C3・4、D3・4、E3・4、F3~5、G5、H5区の各区にわたる北部地点に分けそれぞれに記述していく。

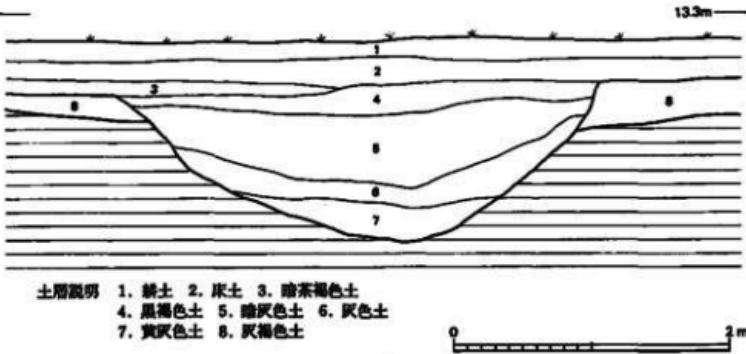
1 西部地点（第1~5図）

S D002

昭和53年度に第2次調査を行った北側のC8区、地番638-1の水田に、弥生時代中期の環濠SD002の延長をさがすトレンチを設定した所、旧湿地帯である黒褐色の粘質土の広がりが確認され、その湿地帯にSD002が接する状態が明らかになった。この旧湿地帯は地番638-1、637-1の南側部分において弥生時代の環濠集落が営まれたと考えられる神賀徹高地と境界をなして、C7区南半からC8区北半まで広がるものである。又、弥生時代前期の環濠SD001の延長は地番637-1のトレンチにおいても確認されず、かなり南側の部位に残る事が推定された。

S D003

C9区地番620-1、626、623に設定したトレンチでは床土直下の黄褐色粘質土に掘りこまれた溝SD003が新たに検出された。発掘を行ったのは地番620-1第3トレンチのみで他のトレンチでは平面検出に止まっているが、その規模は平均して幅約3m、深さは約1.2mである。方向は北東から南東に向いSD002の外側約6~7mに沿っている。ところが地番623の第1トレンチではその東肩が検出されたものの、それより北の地番624のトレンチや、第2次調査区内にはSD003は検出されていないので、恐らくSD002の最東部において2つの溝が合流するもの



第1図 SD003 土層図 (620-1.3 T西壁)

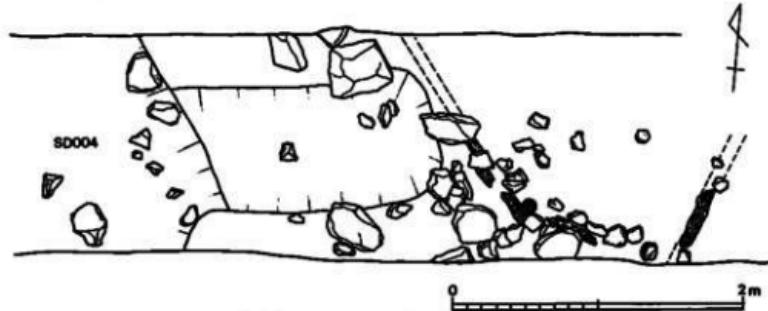


第2図 638-1 2T 南壁土層図

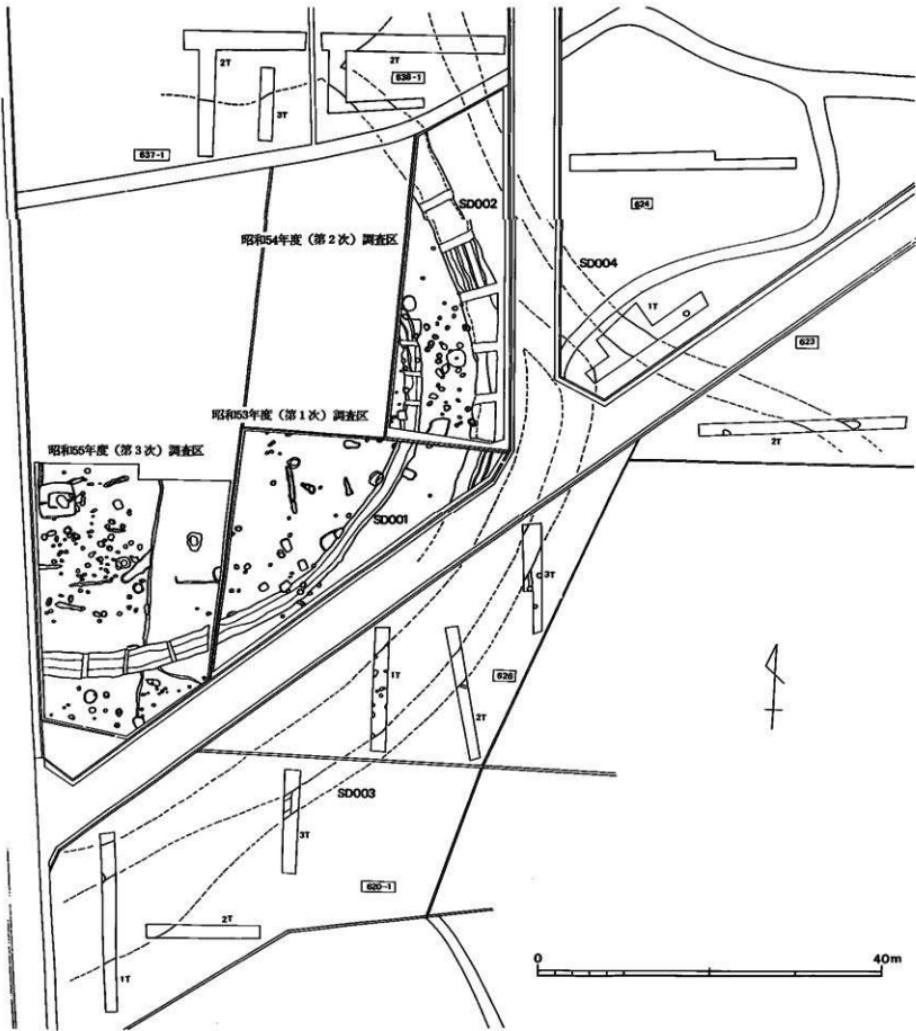
と考えられる。又、地番620-1の第1トレンチ及び、第2トレンチ西側でのSD003の推定延長線部分は、幅広く（幅約9m）、浅い（深さ約40cm）落ちこみになっている事が認められ、遺物の出土もここでは全んど無く、あたかもSD003が地番620-1の第1トレンチと第3トレンチの間で姿を消している如き状態であった。全面的な発掘ではないためSD003の営なまれた年代を限定できないが、地番620-1第3トレンチの部分発掘時の埋土中及び他のトレンチの平面上からは弥生時代前期、及び中期の土器片が多量に出土し、その上限は弥生時代前期までさかのぼりえるものとし、中期中葉には廃絶されたものと考えることが出来る。その土層の状態からはゆるやかな流水あるいは滝水があったと考えられるが人為的な掘削による環濠の一支撑として性格づけたい。

SD004

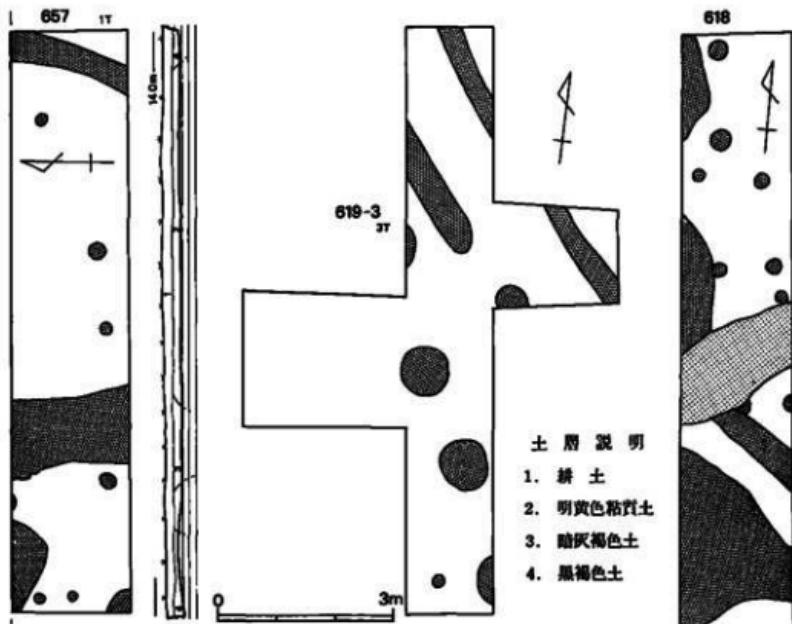
地番623においては床土直下の黄褐色粘質土に掘りこまれた溝、SD004を検出した。この溝は発掘せず平面検出のみであったが、C8区地番638-1の第2トレンチ東側で、土肩断面が検出されている。規模は幅約3m程度であり、深さは60cm程度になるものと思われる。又、遺物は地番623においてはその平面上から多量の須恵器及び土師器が出土し、地番638-1第2トレンチの断面検出部位付近においても同様の状態であった。出土した遺物の年代からこの溝は7世紀から平安時代にかけて営なまれたものと思われ、弥生時代以降の冲積が進んだ段階で新たに掘削されたものと思われる。地番623の第1トレンチではSD004の西肩部に土手上に圓い鉄分を含んだ土層の固まりが認められ、同地番の第2トレンチでは、その東側部分に角石及び木材



第3図 623, 2T 角石、木材検出状態



第4図 西部地点中央部平面図



第5図 西部地点各トレンチ平面図及び土層図

アミ目は遺構平面の検出状態を示し、その横添は遺構の「切り合」部分のみの新(淡)旧(濃)を示す。

が集中して検出され、軒平瓦や口を合わせた状態の須恵器が出土していて、この部位に何らかの溝と関連をもつ施設の存在が考えられる。

その他の遺構

C 7区では、地番657及び658—1, 647—1を調査したが、地番657の第1トレンチでは弥生後期土器及び古式土師器が多量に出土し、住居跡の可能性のある方形土塙の南隅部が検出され、他に溝、ピットが集中している。同様に地番658—1でも溝、ピットが検出された。この北側は昭和55年度の第4次調査で弥生時代後期の集落跡が検出された部位であり、それとの関連が強い遺構群である。地番647—1は低湿地であった。

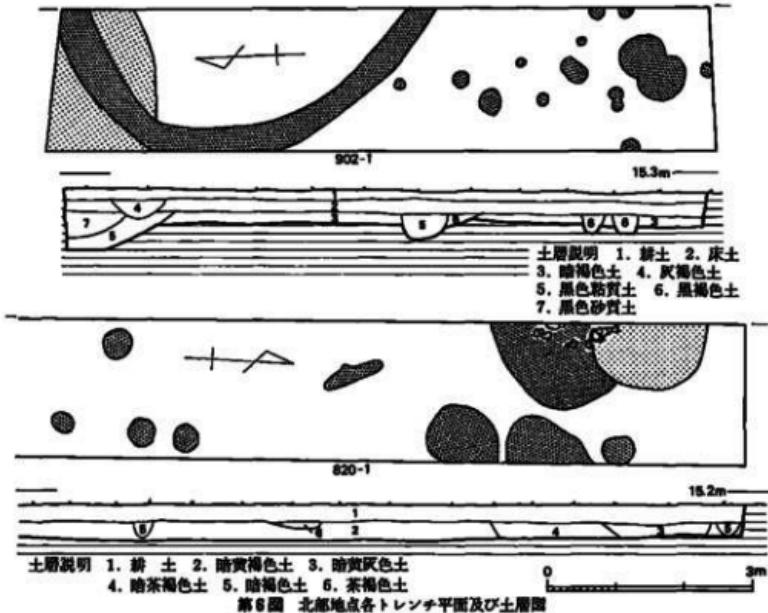
C 9, 10区では、時代が多岐にわたる多量の遺物が出土し、特に地番618では多くの方向を異にする溝が錯綜した状況が検出され、地番619—3では第3トレンチで、北北西から南南東に並ぶ柱穴列が確認された。この柱穴は深さが約80cmに及ぶものである。

2 北部地点（第6図）

北部地点では設定したトレンチのはほとんどに溝、土塙、ピット等の造構が検出されたが、C3区地番1186—3第1トレンチ、C4区地番1192第1トレンチでは水田床土下は旧低湿地であり、E4区地番861—1、862—1の各々第1トレンチは削平を受けた状態であった。又、E3区の地番991、992のトレンチでは北側に冲積扇高地が傾斜して落ちこんでいて、土器片を多量に含む暗褐色の砂質土層となっていた。

時代が確認できる造構はE3区地番992及び地番886の第1トレンチの弥生時代後期の土器を含む溝及び土塙、F3区地番905—1第1トレンチで、7世紀代の溝及び土塙が水田床土直下の暗褐色土層に掘りこまれているもの、F4区地番902—1の古式土器を含む円形及び円弧状土塙、F5区地番796の弥生時代後期の土器を含む溝、G5区地番820—1の弥生時代後期の土器を含む土塙等である。

このうち地番902—1の円形及び円弧状の土塙は切りあって検出され、古式土器片の多量の埋土中包含の状況等、住居跡になる可能性が強いものである。地番796の溝は、方向が南東から北西に向っていて上部はやや削平を受けているものの完形土器(32)を出土する等遺存状態は良好である。地番820—1の土塙内からは弥生時代後期の土器が一括して出土し、このトレンチには他にも溝、ピット等多くの造構が検出され、周辺に集落跡の遺存する可能性が強い。



VI 出土遺物

1 西部地点出土の遺物

弥生式土器（1～9）

1～5は地番620—1、第3トレンチでSD003を部分発掘した際に出土したもので總て前期のものである。SD003埋土中からは前期と中期の遺物が出土し、量的には前期の土器が多いが出土状態を層位的に追うことが出来なかった。1は口径が40cmを超える大形の壺で胴部内外面はヘラ磨きされている。3の内面は指頭によるナデである。4、5は壺形土器で貼り付けの刻目突帯が頸部に残る。6は地番626の第3トレンチのSD003上面より出土したもので肩部に刻目突帯が付されている。以上の弥生時代前期の土器は、過去のSD001調査の際に上層出土の土器に類似し、前期でも新相のものである。7は地番626第2トレンチ、8は地番637—1第2トレンチで出土のものであり、いずれも弥生時代中期前半の龟山Ⅱ式土器に比定されるもので、輪描き沈線文が施されている。9は地番619—3の第3トレンチより出土した弥生時代後期の器台で2孔一対の円孔が3～4箇所に配されるものと思われる。

土師器（10～14）

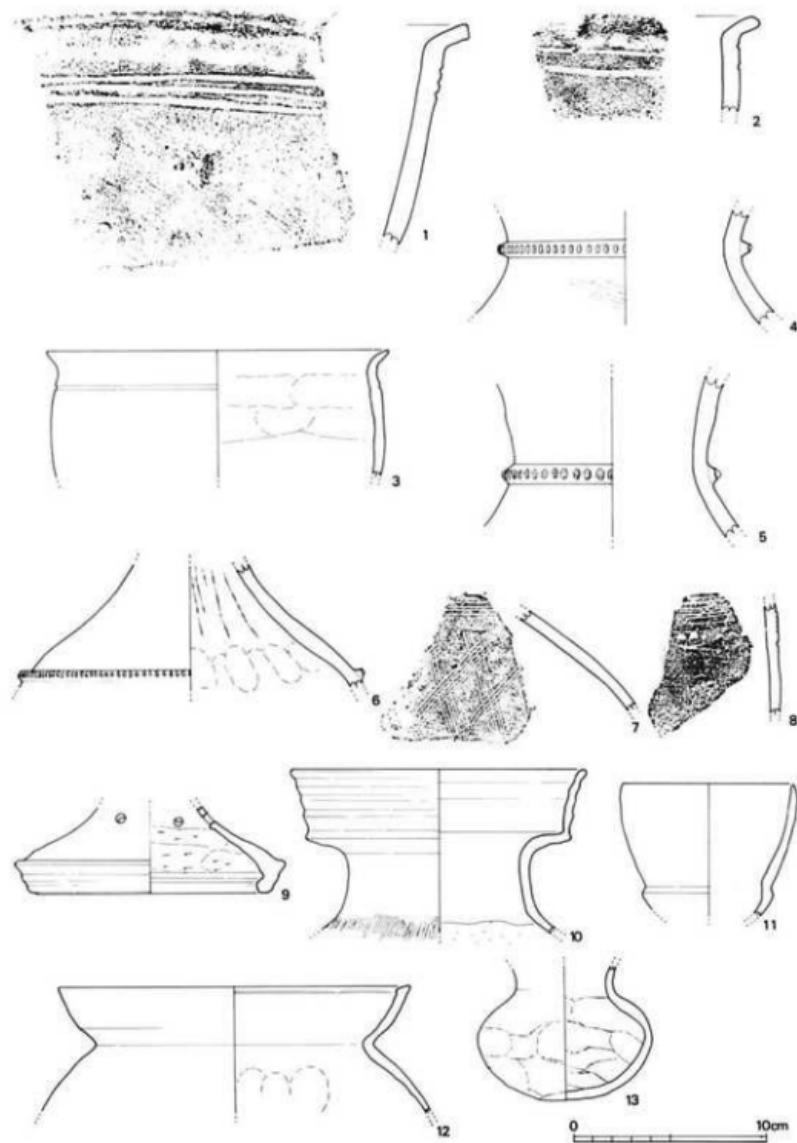
10、11は地番619—3の第3トレンチより出土のもので、いずれも古式土師器であるが、11は蒙内布留Ⅰ式期に平行する小型丸底壺の最古形式のものである。12、13は地番637—1第2トレンチ出土のもので、蒙内布留Ⅱ式期の壺及び小型丸底壺である。地番637—1及び638—1のトレンチからはこの時期の土器片が比較的多量に出土している。14は地番623の第1トレンチより出土した瓶であるが、6世紀代のものと思われる。なお瓶の把手は地番638—1、618等でも出土している。

須恵器（15～22）

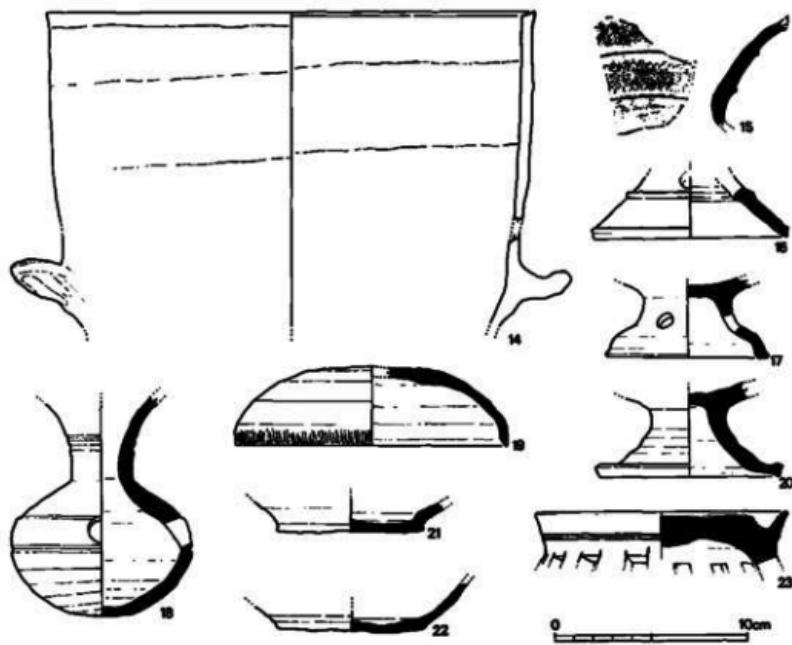
15、16は地番637—1の第2トレンチより出土した最古期に属するもので、15は壺口縁、16は器台の脚台部と思われる。特に16は器形が特異なものである。17はやや新しく、5世紀末から6世紀初頭の高杯脚台部で、地番619—3の第3トレンチより出土している。18は地番618で出土した壺で、焼成胎土共に良好な遺物である。19は地番657の第2トレンチ出土のもので、口唇部外側に細かく刷毛状の搔き取り痕がある。20は地番626の第3トレンチより出土しているが、18～20は6世紀後半に比定できる。西部地点では須恵器の総量として、この時期のものが多い。21、22は地番623の第2トレンチの角石、木材集中地点（第3図）より出土のもので、互いに口を合わせるように出土した。時期は9世紀初頭と思われる。

円面鏡（23）

地番638—1の第2トレンチより円面鏡（23）が出土している。神辺平野では3例目の出土



第7圖 出土土器実測図(1)



第8図 出土土器実測図(3)

であり、県内では8例目となる。海陸の区別には明瞭で、圓脚部には長方形透しがある。

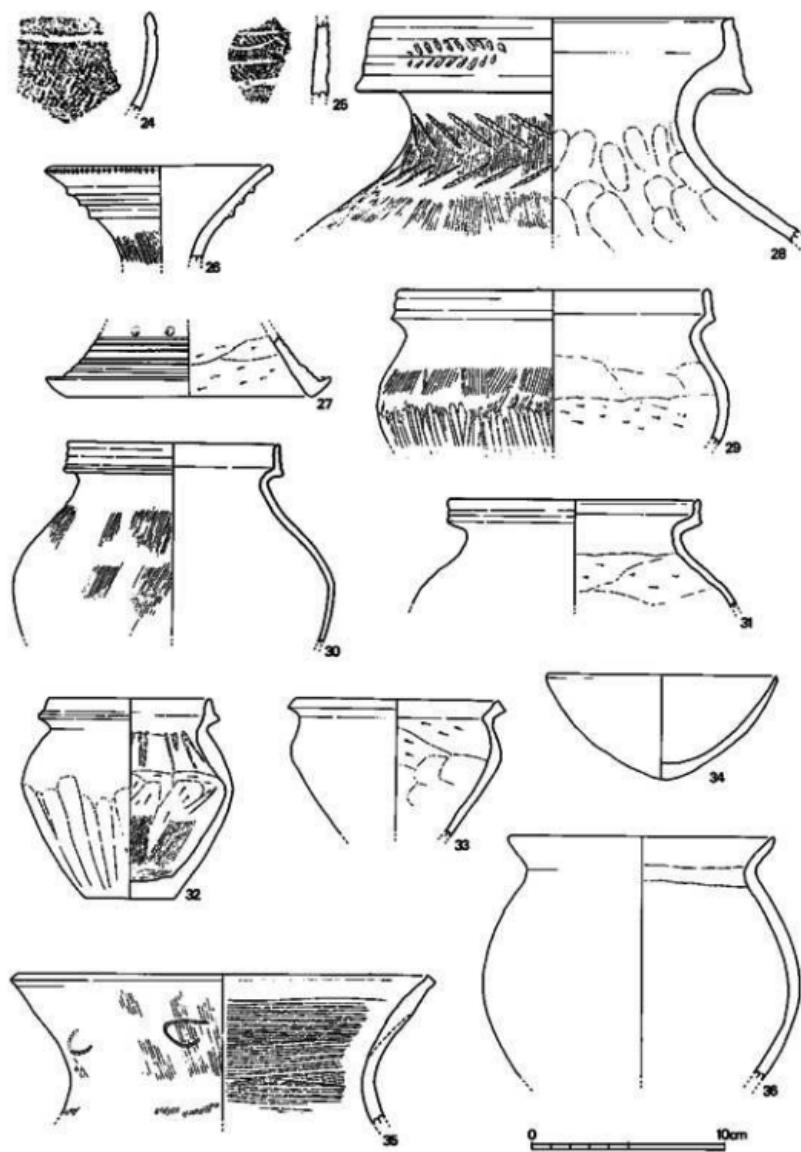
2 北部地点出土の土器

縄文式土器 (24, 25)

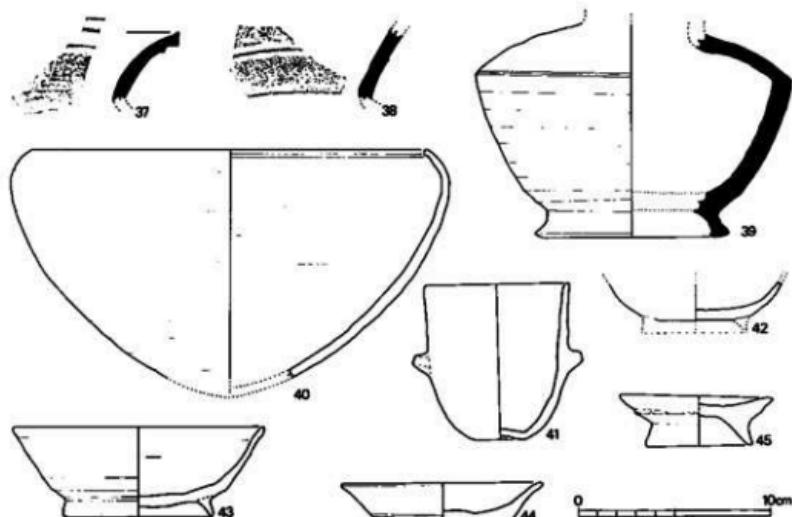
昭和55年度の第4次調査においてC3区から縄文時代後期の土器が出土しているが、本年の調査でもやはり後期の竈崎KII式に比定される2例が出土した。24は地番905-1の第1トレンチより出土した鉢形土器口縁部で、口縁直下に沈線を施している。25も鉢形土器と思われ弧状の沈線と唇消縄文が認められる小破片で、地番886の第2トレンチより出土している。

弥生式土器 (26~36)

26は地番905-1の第1トレンチより出土した弥生時代中期前半の壺の口縁部で、口唇部に刻目を施し、貼り付け帯を三重に廻らせる。27は地番894-1で出土した弥生時代後期後半の器合で2孔1対の円孔が3個所にあると思われる。28~30は地番820-1の土坑内より一括出土の弥生時代後期前半の壺及び甕である。28の頸部には板状工具の押捺による「ノ」の字文を施している。29の胴部中位以上は、本来ヘラ削りによって調整され、その上をナデている。



第9圖 出土土器実測図 (1)



第10図 出土土器実測図(4)

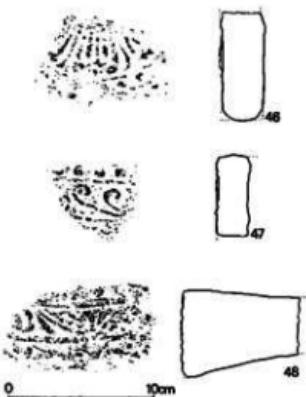
30の内面は磨滅が著しく調整は不明であるがヘラ削りと思われる。31、32は地番799の溝状構内出土の遺物であり、地番905—1第1トレンチ出土の33と合わせ、これらの土器は28~30の土器よりはやや新しい様相を持ち、後期後半の古い時期に位置するものと思われる。34は地番816—1より出土の鉢形土器で後期後半に位置づけられ、同じく35は地番892より出土した後期後半の壺形土器口縁であるが、口縁下位に円弧状の刻文が施されている。内外面は刷毛調整されている。36は地番902—1出土のもので円形及び円弧状の土塙(第6図)とは伴なわない。磨滅が著しく調整は不明であるが、器形としては弥生時代終末期あるいは古墳時代初頭の壺形土器である。地番902—1のトレンチの土塙からは古式土師器片が多量に出土したが復元是不可能であった。

須恵器(37~39)

37は地番1192の第2トレンチより出土し、38は地番857のトレンチより出土したもので、いずれも壺の口縁部であり最古式のものである。本年度の調査では他に地番691においても古式の須恵器が出土している。39は地番905—1の床土直下の溝より出土のもので7世紀から8世紀にかけての年代が想定される。

土師器(40~45)

40は地番892で出土の鉢形土器であり広島県内では類例の少ない遺物である。内外面共に



第11図 軒丸、軒平瓦実測図

ていねいにナデて仕上げられているが、外面にはヘラ磨きの如く左上りに細かいヘラ工具調整が明瞭に遺存する。色調は明灰褐色を呈す。8世紀代の遺物である。41は地番886の第1トレントより出土のミニチュア土器で瓶を形どるが時代は不詳である。42は地番1192の第1トレントで出土したもので、深い色の緑釉がかかる。底部は糸切りで高台が付されるもので、平安時代のものと思われる。43は地番905—1第2トレント出土のもので平安時代の土師器であるが、同トレントからは十数個体分の同時期の环身が出土している。44は905—1の第1トレント出土の中世の土師器。45は地番820—1のトレントより出土の合付皿で時期は平安時代以降のものであろう。

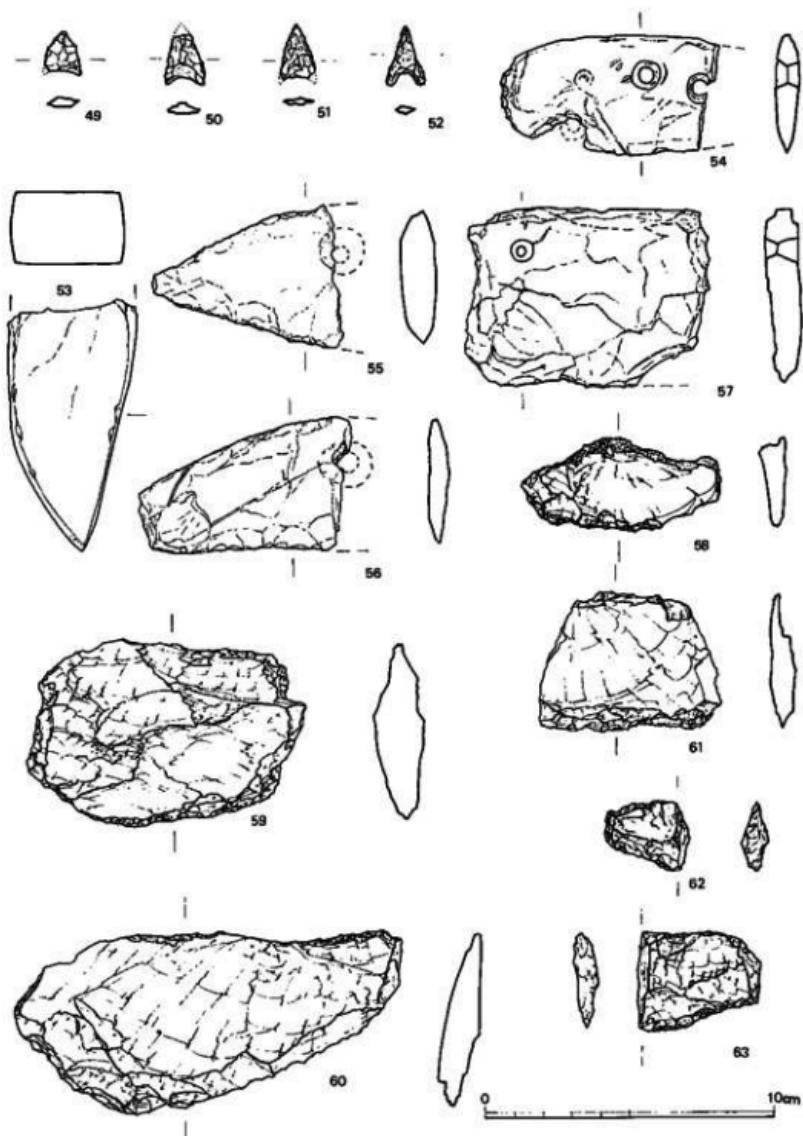
瓦 (46~48)

46, 47はE3区地番991で出土したものである。46は小山池廃寺出土の複弁蓮華文軒丸瓦と同型范のものと思われる。47は同じく小山池廃寺出土の扁行唐草文軒平瓦と同型のものである。48も扁行唐草文軒平瓦であるが、出土地点はC9区地番623の第2トレントであり角石、木材の集中検出地点（第3図）と関連を持つものではないかと思われる。

石器 (49~63)

本年度も西部地点を中心として石器が出土したが、いずれも弥生時代のものである。石鎚の出土地点は49がC9区地番626—1, 50, 51が同区地番620—1, 52がE4区地番862—1で、いずれも安山岩製である。53はC9区地番626出土の片刃石斧で、石質は凝灰岩である。54~57は造りが粗雑ながら磨製の石包丁であるが、54は穿孔が未通のものを含め4ヶ所にあり特異なあり方を示している。出土地点は54がC8区地番637—1, 55~57が同区地番638—1である。58~63は不定形の打製石器であり、いずれも安山岩製である。各々については58, 61はサイドスクレーパー、59, 60は石包丁その他の石器の未製品、62はエンドスクレーパー、63は楔形石器と考えられる。

出土地点は、58がC9区地番626, 59がC10区地番619—3, 60がE4区地番861—1, 62がF3区地番905—1, 63がC4区地番1192である。



第12図 出土石器尖端図

V ま と め

昭和52年度より開始した大宮遺跡の内容及び規模確認調査は本年度で第5次になった。ここでは今次調査の成果をふりかえり、問題点のいくつかについて検討を加えまとめとしたい。

1 旧地形の復元（第13図）

大宮遺跡とされる湯野土地区画整理事業計画地内全域にわたり遺物が拡散して出土する状態は、その地下に大規模な集落跡の存在を想起させるものであった。しかしながら調査の結果においては、部分的には遺構の検出が見られたものの、他の大部分からは遺構は検出されず、その内の約半分が旧低湿地であり、又、残り部分は黄褐色粘質土の基盤土が削平を受けた状態であった。すなわち散布して出土する遺物の大半が直接には遺構とは結びつかない事が確認されたのである。さらに、遺構の遺存する部位においては時代的に複合する遺物、遺構の検出が見られ、遺跡の性格が複雑な様相を示すものであることが認識されている。このため遺構の遺存する部位の正確な範囲限定が必要となり、同時に旧地形の復元作業によって遺構本来の性格が追求され、遺存する部位の歴史的位置づけがなされなければならないのである。

大宮遺跡の所在する湯野の水田地帯は、神辺平野のほぼ中央に位置し、東側は天井川である堂々川が流れ、西側はやはり天井川化しつつある深水川が流れる。更にその南東には高屋川が流れている、以上の三本の河川の沖積作用がこの地の成因となり、変容の原因となったのである。今この地の現水田面高と、本年までの調査の成果を合わせ遺跡立地基盤と思われる黄褐色粘質土の等高線を推定すると第13図の如くなる。この結果黄褐色粘質土の微高地がほぼ北北東から南南西に向って存在し、その東側と南側に旧低湿地たる黒褐色土（砂質）の広がる状態が判明する。又、北端及び南端の部分にもこの黒褐色土の広がりが認められる。この微高地は上記3河川の沖積作用による大規模な「自然堤防」であり、黒褐色土の広がりは「後背湿地」であるが、改修前の堂々川、深水川の河道と思われるバラス層も部分的に認められる。自然堤防たる微高地の中央大半はドットの落とされた部分において削平を受けているが、この原因は人為的なものと考えられ、後で記述する条里制の施行もその大きな要因であろう。残る余白の部分が原地形が遺存するか、あるいはきわめて削平度の少ない部位であり、遺構、遺物はそこに集中して検出されるのである。（第13図②）その分布の状態を分析すると、西部と北部の2地域に大別されることは本文中でも述べたことであるが、西部地域では弥生時代前半期の遺構、遺物が多く、北部地域では古墳時代後半期から中世に至る遺構、遺物の検出が比較的多い状況は君取できるものの、時代が複合して表われるという特徴は全般に通じている。又、D7区で⁽⁴⁾の中世の遺構、F6区での弥生時代後期の溝の検出、F7区での削平度の弱い部位での古式須恵器の出土等の状況があり、それらを勘案するならば本来遺構は沖積微高地上全域に存在して



第13図 大宮遺跡旧地形復元図

いたと考える事が妥当である。このように大宮遺跡は沖積平野の自然堤防上に立地するものであり、現状では遺構が遺存する部位が限定されている状態が認められるのである。沖積平野の微高地上に遺跡が立地する例は備後南部では同じ神辺平野の御領地区一帯の旧高屋川河川敷の北側自然堤防上の各遺跡が上げられ、大宮遺跡も立地的には異ならぬものである。

2 遺構と遺物

縄文時代

大宮遺跡からは現在4地点から縄文時代後晩期の土器片が出土している。C9区で出土の縄文土器は前期から晩期にかけての年代が比定され、C3区、E3区、F3区から出土のものは後期後半の年代が比定されている。⁽⁵⁾ 開通の遺構は認められないものの、C3区ではまとまった量の出土があり、C9区での出土は弥生時代前期の環濠集落の立地する部位という背景をもち、今後遺構の検出される可能性は極めて高い。

弥生時代

C8、9区にみられる前期から中期にかけての環濠集落跡は本年の調査において新たな成果を得ることが出来た。すなわち中期の環濠SD002の南東部外側に前期から中期の土器を包蔵する溝SD003の発見と、SD001及びSD002の環濠北側部分が旧湿地帯に接することである。SD003については面的な精査の資料に乏しいものの明らかに人為的な掘削溝であり、造営時期の決定等の検討が必要である。又環濠北側部分の湿地帯の広がりの確認は、環濠が全周囲を囲繞するものではなく、自然地形を利用したものである事を示し、集落の北に水田が広がり、背後の微高地とは環濠をもって画する有様を想定せしめるものである。

昭和55年度の第4次調査で明らかにされたC6区の集落跡や、本年度の調査でも北部地域において多く検出された溝、土塙等の弥生時代後期の資料も豊富であり広い範囲にわたる集落跡の遺存が推定される。この時期には生産基盤たる水田耕作面は微高地の東西両側面にある低湿地に存在し、住居跡の単位集団毎に区画された溝が縱横に走る様相がうかがえる。

古墳時代

古墳時代の資料としては遺物の広範囲かつ多量の出土が見られ、遺構としてはC9区では住居跡、F3、4区では住居跡状の古式土師器を含む土塙等の検出があり、弥生時代から継続して集落が営なされたと考えられる。しかしながらこの時期には土木工事の進展による条里施行前の人為的削平あるいは埋め立てによる耕作基盤面拡大の可能性も考慮されねばならぬであろう。

奈良・平安時代

現在の主要な水田畦畔の様相から条里的遺存が以前から指摘されているのであるが、第13回に見られるように沖積微高地の削平は水田畦畔が規整された部位全面において、畦畔の不整な部位については行われていないこと。削平された部分からは古墳時代後期以後の遺物の出土が

皆無に等しいことより、人為的削平の実施は条里制の施行と密接な関連をもち、以後長く水田耕作が専ら行われていたと言えよう。又、削平が行われなかった部位については、古瓦、土器等の奈良・平安時代の遺物が多く検出されていて注意されていたのであるが、これらの部位を国府跡あるいは駅館跡と推定しうる遺構の検出は出来なかつた。しかしながら本年度C9区から円面鏡が出土し、遺構としてはSD004が検出され、北部地点でも時代が異なると思われる柱穴、溝等の検出があり、後日平面的な調査を行なえばこれらの部位の重要かつ詳細な様相が明らかになるものと考えられる。

中、近世

中世、近世についても遺構遺存地域を中心とした遺物、遺構が検出されているが、トレンチ調査による発掘ではその性格については明確にはできない。単独検出のビット、土塙が多く、今後の面的調査を待たねばならない。

以上のように大宮遺跡について旧地形の復元とともに概観を行つたのであるが、遺構の遺存する部位は限定されてはいてもなお広範におよび、その内容は绳文時代から中、近世に至る歴史的かつ豊富なものである。その範囲外の条里制地割遺存推定地域についても今後の検討が必要である。しかしながら、遺跡周辺は近年とみに開発の進行が進まりつつあり、早急な保存対策が講ぜられねばならないことは言うまでもない。また大宮遺跡の内容は備後南部の歴史の解明に資するに止まらず、日本の文化の曙光期をも明らかにする重要な資料となりえるものであり、将来、画的かつ綿密なる調査が実施されることが望まれる。

註

- (1) 地理用語については籠瀬良明『自然堤防』(古今出版) 1978による。
- (2) 昭和49年度の神辺町教委の備後国府跡(方八町遺跡)の試掘調査の資料による。
- (3) 松下正司、鹿見啓太郎、加藤光臣「神辺方八町(推定備後国府跡)の調査」『草戸千軒町遺跡』17, 19, 1975
　　広島県教育委員会『神辺御領遺跡第1次発掘調査報告』1976
　　広島県教育委員会『神辺御領遺跡第2次発掘調査報告』1978
　　広島県教育委員会、(財)広島県埋蔵文化財調査センター『神辺御領遺跡』一神辺農業協同組合御野支所建設に係る—1979
　　広島県教育委員会、(財)広島県埋蔵文化財調査センター『神辺御領遺跡』一国鉄井原線建設にかかる発掘調査報告—1981
　　神辺郷土研究会『弥生時代の神辺』—神辺の歴史と文化第3号—1975
- (4) 広島県教育委員会『大宮遺跡第1次発掘調査報告』1978
- (5) 広島県教育委員会『大宮遺跡第2次発掘調査報告』1979
- (6) 広島県教育委員会『大宮遺跡第3次発掘調査報告』1980
- (7) 広島県教育委員会『大宮遺跡第4次発掘調査報告』1981
- (8) 福山市史編纂会『福山市史』上巻 1963
　　神辺町教育委員会『神辺町史』前巻 1972
　　榎原芳秀「大宮遺跡と安那郡」『芸能』第10集、1981

図 版

図版 1



大宮遺跡遠景（南より）



大宮遺跡北部地点近景

図版 2



S D003 (C 9区 620—1 第3トレンチ)

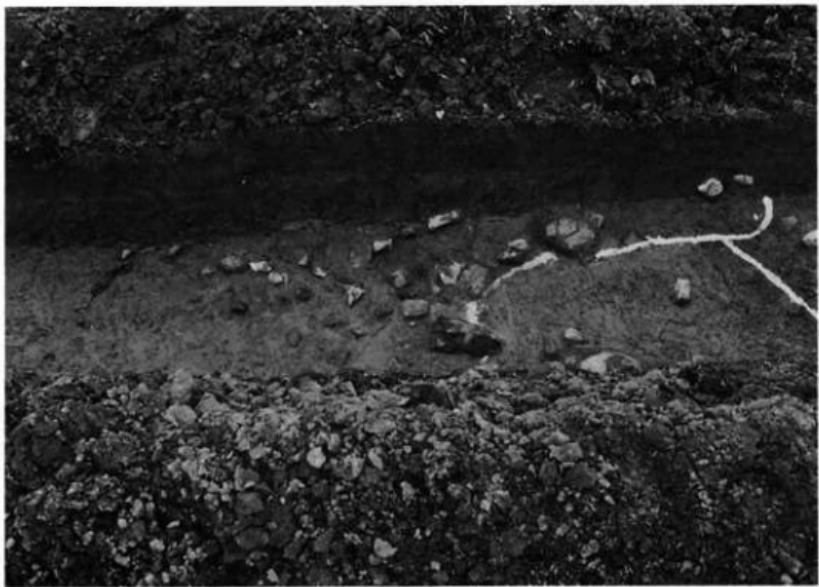


S D003 土層断面(東より)

図版 3



C 8 区 638—1 第2トレンチ



C 9 区 623 第2トレンチ 角石木材 検出状況

図版 4



C 7区 657 第1トレンチ



C 10区 618

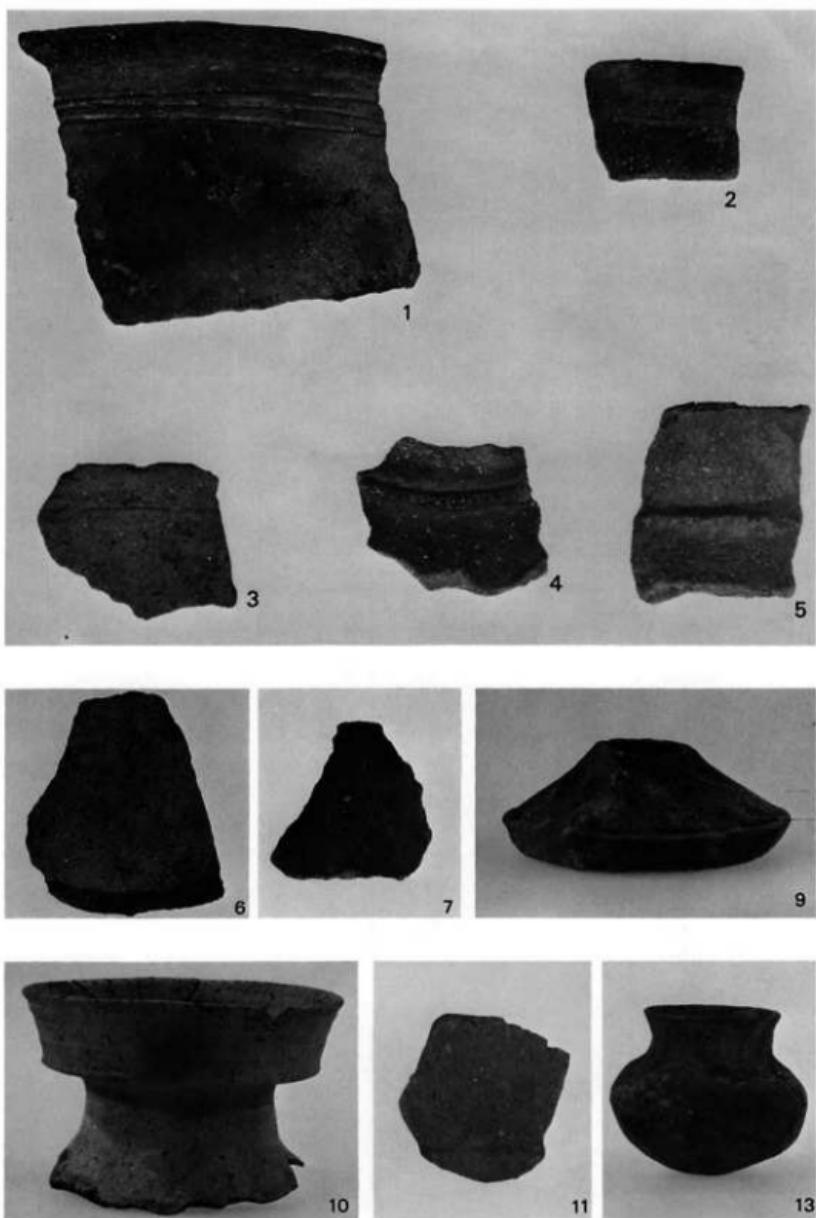


G 5区 820-1

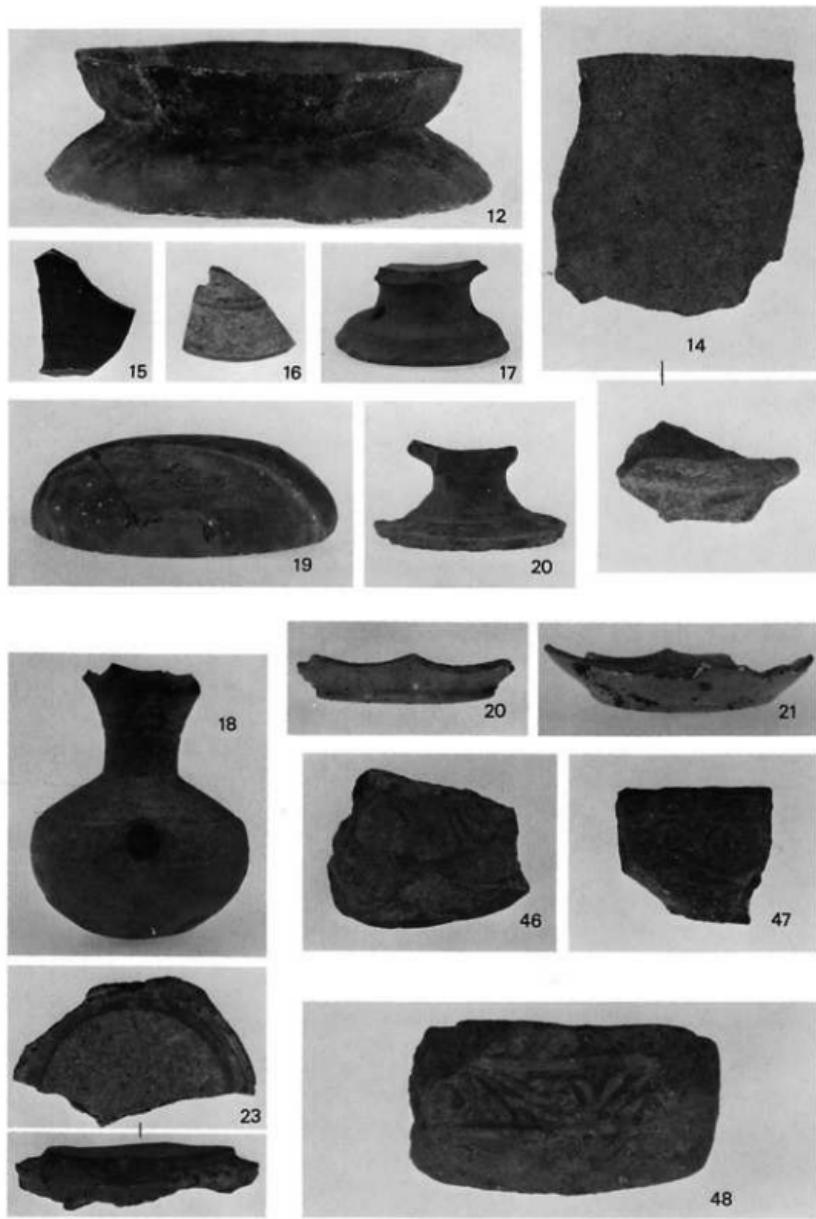


F 4区 902-1

図版 5

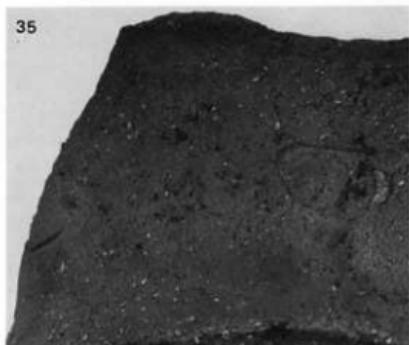
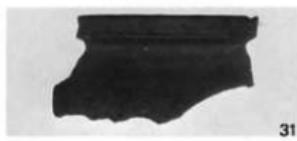
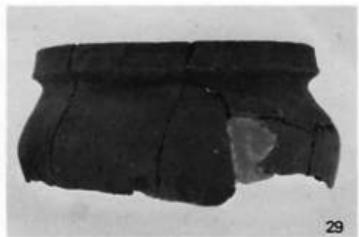
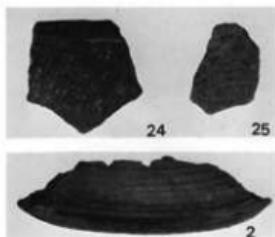


大宮遺跡出土土器

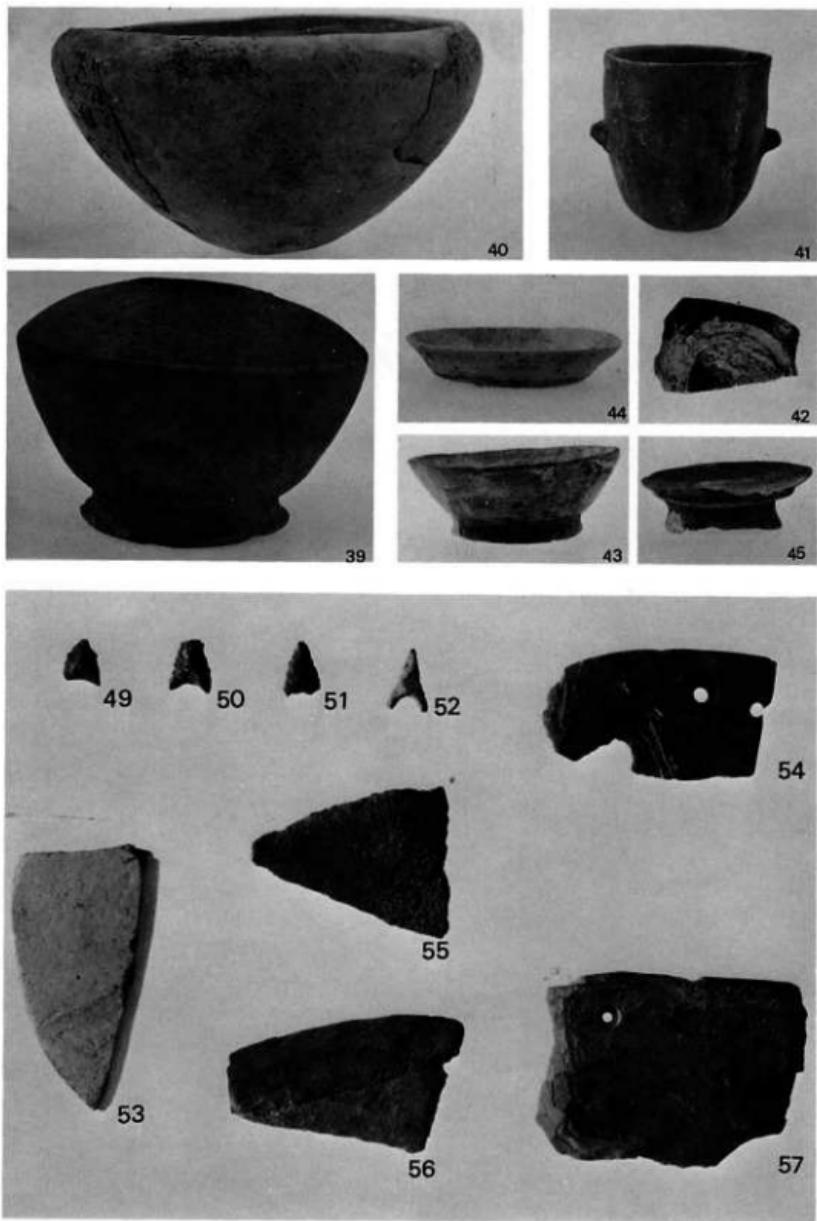


大宮遺跡出土土器及び瓦

図版 7

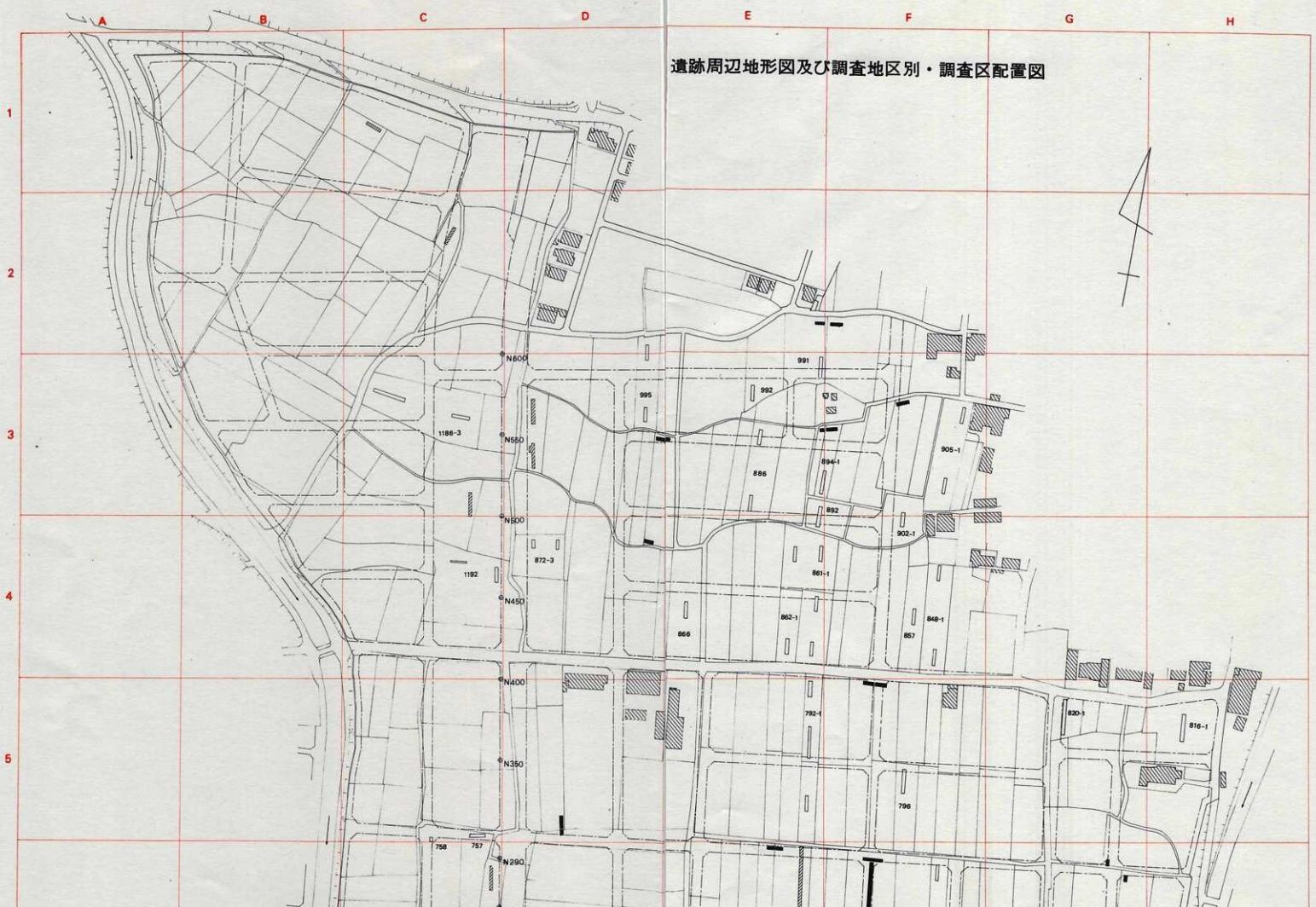


大宮遺跡出土土器

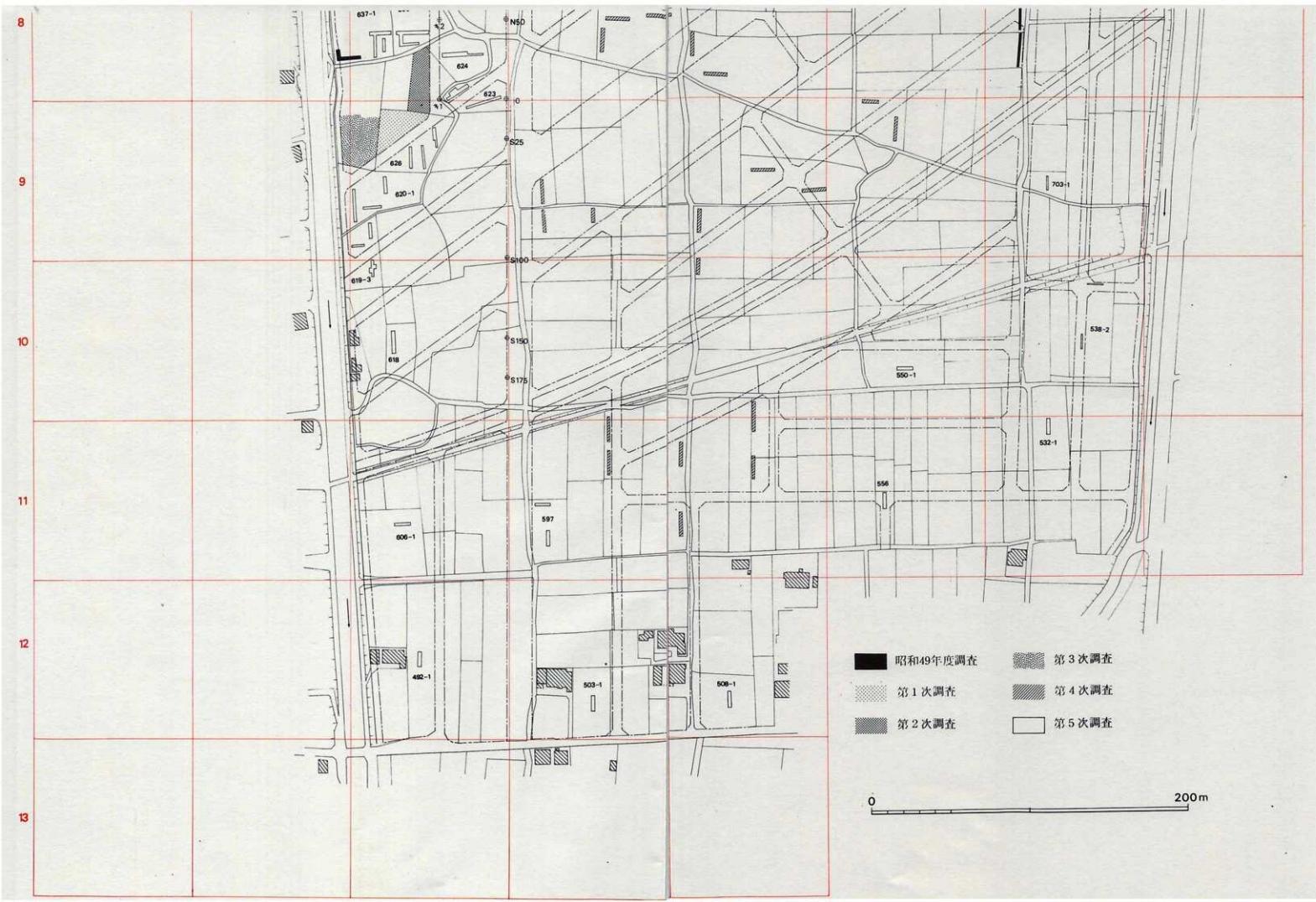


大宮遺跡出土土器及び石器

遺跡周辺地形図及び調査地区別・調査区配置図







大宮遺跡第5次発掘調査概報

昭和57（1982）年3月31日

編集・発行 広島県教育委員会

印 刷 株会式社 柳盛社印刷所